巻頭言

小学生からの大きな声援

院長　長山 直弘

このコロナ禍によって子どもたちも色々なストレスを受けています。親が職場でコロナにさらされていることによるストレス、家庭での自分の役割が増えることによるストレス、通学が出来ない時期にはそのことによるストレス、不安からくるストレス、などなど。そのことは、竹丘病院から一番近い小学校である清瀬第三小学校の児童たちにおいても同様ですが、彼らは自分たちの大変さはひとまず横に置いて、周りのもっと大変な思いをしているであろう人々を励まそうと考えました。そして四年生と五年生のクラスの子たちが我が竹丘病院職員に感謝と励ましの便りをくれました。便りには児童たちの思いやり溢れる気持ちが精一杯に書かれていました。職員のみなさん読まれた通りです。

世界ではコロナによって公式発表だけで約120万人が死亡しています（11月1日現在）。親や兄弟姉妹を亡くした子どもたちは何万人、何十万人といるでしょう。犠牲になった子どもたちもいます。

私はお便りを頂いた翌日には礼状を書き、児童たちを讃えました。それでも不十分と思いましたので、ある朝清瀬第三小学校の近くへ赴き、登校してくる児童たちの様子を拝見し、ランドセルを背負ったまま校庭に集まっている児童たちを遠くから眺め、あの集まりの輪の中から便りが来たのだなあと思いながら再び彼らの善意を味わいました。そして保養会の全職員を代表して彼らと先生方とその周りの全ての関係者に感謝の気持ちを改めて送りました。

私たちは元気を得たけれど、さて私たちは将来世代にどんな善いことを残すのでしょうか。核兵器開発、環境破壊、赤字財政、富の偏在などの負の遺産に見合うだけのものを残そうとしているでしょうか。ささやかでも私たちにできることとしてはどのようなことがあるのでしょうか。そう考えても、結局のところは目の前の自分たちに与えられた仕事を誠実にまごころ込めて行う以外にできることはないように私には思えます。